

い」と言つて、声には出さなくとも、心の中では泣き叫び続けたことだろうと思う。それにしても、日本の空気は重かつた。

春たちて、野にナツメあり満州の

幼きころの思い出は

山に戯むる、友の影

水清く、星降る大地承徳に

友を招きて酌み交す

人の命の輝きを

忘れられない事実

東京都 万代 妙子

一 はじめに

父の生家は本家ではあつたが、祖父の時代にたくさんあつた田地畑も無くし、岡山県勝田郡勝間田町の、片田舎に残つたわずかな畑を耕し、細々と暮らしていた。父はその家の長男として生まれ育つたが、村一番の秀才と言われながらも、家計の都合で尋常高等小学校までしか進学できなかった。卒業時に学校の強い勧めもあつて、南満州鉄道株式会社に職を得て渡満をした。我が家の古いアルバムの中に、大連市にある満鉄の野球練習場で、満鉄のネーム入りのユニホームを着てベンチに座っている、若い父のセピア色の写真が一枚残っている。

母は父より七歳下だが、やはり岡山県の片田舎で生まれ育つた六人姉の末っ子だった。女学校

を卒業したその年の六月に、世話する人があつて父のもとに嫁いだ。結婚した翌年の大正十二（一九二三）年八月に、兄が生まれた。母はまだ十八歳という若さでもあり、初産ということと、異国の地であるということなどで、岡山の実家に帰る出産した。四つ違いで、昭和二（一九二七）年八月に関東州の普蘭店福寿街の満鉄の社宅で私が生まれ、昭和五年七月には石家で弟が生まれた。私が普蘭店の幼稚園を終えるとすぐに、父の転勤に伴い大連市に住居を移した。兄と私は、大連市の伏見台尋常高等小学校に入学した。父はその後、北満の濱江駅長として哈爾浜市に単身赴任して行った。

二 学生生活と哈爾浜での生活

父から、満鉄の社宅に入れたということで、私たちは新学期になつて東洋のパリと言われる、異国情緒豊かな哈爾浜市に移転した。私は花園尋常高等小学校の三年に編入されて、極楽寺にあつた満鉄の社宅から、満鉄の子弟だけに仕立てられた

スクールバスでの通学が始まった。兄は中学校に進学することになったが、父が将来の教育のことを考え内地の学校を選んだので、岡山の實家に預けられた。

満鉄は、五年ぐらいの単位で転勤があつた。そのたびに、子供を転校させるのは教育上良くないと考えた父は、いつも勤務地に単身赴任し、広い社宅でただ一人の生活であつた。幸いあまり遠い所でなかつたので、春、夏、そして冬の休みには、必ず父のもとに出かけて過ごしていた。当然、哈爾浜市の満鉄の社宅には住めないのです、通学に便利な所に新築の三階建ての大きなアパートを見付けて引越した。それからは、馬家区新永和街での母と私と弟の三人の生活が始まった。そして、ここが引き揚げるまでの最後の家となつた。昭和十五年四月、哈爾浜高等女学校（昭和十八年に哈爾濱富士高等女学校と改称）に入学した。

憧れのセーラー服に身を包み、希望に満ちて入学したその六月、「チフス事件」が発生した。チフ

スは瞬く間に市内に蔓延し、たくさんの病人が出た。そのときの新聞によると死者は八十一人、もちろん日本人だけの数字で、白系ロシア人や中国人の死者を加えると、どれほどの数になっていたであろうか、よく分からない。市内の日本人小学校は、臨時休校となった。不幸にも、チフスは我が女学校関係者にも及び、教員二人、主に寄宿舎の学友二十人が死亡した。自宅通学者もチフスにかかり、何人か入院した。このチフス事件のため夏休みが早まり、恒例の運動会も中止になった。事件が下火となり、九月の新学期が始まった中旬に、「合同慰霊祭」が講堂で厳かに行われた。今思い出しても悪夢としか言いようがない事件であった。そのころでもいろいろとうわさが流れていたが、中国の人たちは、生ものを口にしないので罹病者が少なく、死亡者が日本人に多かったのは皮肉なことであった。

二年生の十二月八日、太平洋戦争が始まった。早速英語は敵国語ということで中止となり、使い

慣れた横文字が奇妙な日本語に変わり、大好きだった音楽にもそれは波及し、日本的なものしか歌うことは許されなくなった。私たちの学校の卒業式では、「蛍の光」を歌うことは禁止されてしまった。

学校内では、戦争色がどんどん深まっていくに従って、軍服の肩章の縫い付け、シャツのボタン付けなど軍関係の奉仕時間が増えていった。これらの作業は校内だけにとどまらず、軍隊まで出向いたり、工場にも駆り出されるようになった。制服のスカートがモンペになり、セーラー服がヘチマ襟となり、防空ずきんと救急袋を常備し、地域の班ごとに隊列を組んでの通学になっていった。リベラルだった先生方は、どんどん異動になって去ってしまわれた。各学年のクラスに数人いた朝鮮の学友たちは、「創氏改名」で日本の姓名に変えられていった。新聞やラジオから流れてくる各地の戦況が、日増しに厳しく伝わってくるようになったが、哈爾濱での私たちの生活はまだまだゆと

りがあり、食べ物にも不自由は感じなかった。

四年生の昭和十八年九月、先生方の奔走で、日本内地の修学旅行に出かけることが決まった。日本人なのに日本の国を知らない私たちに、今のうちに是非日本を見せたいという、先生方の熱い働きかけであった。当然、強い反対もあったという。日本国内は今戦時体制であるということで、全員そろいのモンペを穿き、リュックサックを背負うことなどが義務づけられ、四班に編成され各班に二人の先生が付き添い、「母国訪問旅行」と銘打って、三週間の旅に出発した。初めて見る日本は何もかも珍しく、楽しく勉強にもなった旅であったが、「日本語が上手ですね」と言われたのには参った。

三週間の旅を終えて、自宅に全員無事戻ってほつとしたのも束の間、「崑崙丸沈没事件」が起こった。朝鮮海峡で機雷に触れたのだということであったが、崑崙丸に乗って帰って来たばかりの私たちの班はもちろんのこと、先生方も本当に肝を冷

やした。この事件のため、母国訪問の修学旅行は私たちが最後になってしまった。在満日本人高等女学校三十数校のうち、昭和十八年中に日本内地に修学旅行が実施されたのは、私たち一校だけだったという。

昭和十九年三月に卒業になった。日本の戦況はますます厳しくなり、家庭にすることは許されなくなり、職に就くことを強制されるようになった。上級学校進学組も、日本内地進学はまかりならぬとの通達が出た。満州には、旅順女子師範学校か、奉天（瀋陽）と新京（長春）の女学校にある専攻科しかない。私も日本内地の進学は断念し、やむなく新京敷島高等女学校の専攻科に入学した。しかし、勉強したのは何カ月だっただろうか。入学して二カ月もすると、野外での救護教練が行われ、担架を持つての匍匐前進や、三角巾・包帯の巻き方などを軍に指導された。そして寒い一月から三月までは、遼陽に学徒動員され、軍関係の工場毎日戦車爆破に使うという、一辺五センチメートル

ルの四角形の爆薬を包む作業を、朝から夕方までやらされた。爆薬は黄色で、一日の作業を終えると全身黄色になるので、お風呂に入ってから宿舎に帰る毎日であった。この風呂焚き当番の男子中学生の中に、哈爾濱中学の同期生がいたことを、日本に帰国し同期会が開かれたときに聞かされた。その他の男子学生たちは、寒い戸外で重労働をさせられ、大変な思いをしたということであった。

昭和二十年四月、卒業の年ということで学園に戻って授業が始まった。しかし、七月に入ると再び動員となり、今度は新京の関東軍司令部地下室で、文書折りの作業に通った。八月九日も出かけて行くと、司令部の中は混乱していて、学生たちは直ちに学校にもどれと言われた。学校に戻る途中の新京駅前の広場は、軍人や民間人の列車の乗る人々で大混乱していた。寄宿舎に戻って、ソ連軍が参戦したことを知った。私たち十人の哈爾濱高女出身者は、高女での担任だった舎監の先生の手配で、八月十一日の列車にかりうじて乗車でき、

無事それぞれの親元に帰れた。そのころ中学二年生だった弟も、主として長野県出身者で構成された、吉林省八道河子開拓団に動員されていて、安否を心配していたが、いち早く動員解除になって私より一足先に家に帰っていた。

三 敗戦後の生活

八月十五日正午、重大放送があるとのことでラジオをつけたが、雑音がひどく「忍び難きを忍び……」くらいしか私にはよく分からなかった。戦争に負けたらしい……と聞かされた。アパートの二階の窓から外を見渡すと、道路を隔てたすぐ前には、主として白系ロシア人たちが住んでいる静かな住宅が並んでいたが、小さな赤旗がそれぞれの住宅に掲げられていた。青く澄み切った空と、目にした赤い旗の色は今でも私の目の底に残っている。

当時、父は哈爾濱近郊の舒蘭駅長をしていたが、敗戦と共に消息が途絶えてしまった。母と私と弟の三人は、父の安否を心配しながら、ソ連軍が進

駐して来るといふこともあつて、不安な毎日を過ごしていた。私もお下げ髪を短く切り、上には黒っぽい服を、下は黒いズボンで身を包んだ。とうとう我が家にも、自動小銃を肩に掛けたソ連兵四、五人がドアをこじ開け、「ダワイ、ダワイ」とわめきながら土足で踏み込んで来た。私たちには目もくれず、部屋に入つて手当たり次第物色し、電話機まで引きちぎつて嵐のように出て行つた。その日から、毎日のようにやつて来ては荒らして行つた。満州に最初に進駐してきたソ連兵は、四人部隊だと聞いた。頭は丸坊主、腕には一本、二本と入れ墨の線が入つた柄の悪い連中ばかりで、時計の見方も分からなかつた。

ある日のこと、押し入つて来た中の一人は、仲間たちが物をあさつてゐる間、黙つたまま他の部屋を見て回つていたが、茶箆筒の上の小さな額に入れてあつた二つの写真を、じつと見ていた。と思つと、それにすつと手を伸ばして額から出し、二枚重ねて真ん中から引き裂き、床にぽんと投げ

捨てた。そして、無言のまま私たちの前を通つて、物色を終わつて出て行く仲間の一番後から、悠然として去つて行つた。母は、急いで投げ捨てられたその写真を拾い上げると、糊で貼り合わせ本の間にしまつた。この写真の一枚は陸軍少尉の制服姿の兄で、もう一枚は海軍将校の制服を着用した兄の大学での大親友の写真で、母は毎日二人の武運長久を祈つて陰膳を供えていた。この二枚の写真は無事に持ち帰ることができ、今でも大事にアルバムに貼つてある。この写真の二人は、ともに東京六大学の一つ、法政大学に在学中、昭和十八年十月二十一日、雨降る神宮外苑で行われた「出陣学徒壮行会」に参加した。壮行会后、配属先が決まり一週間の休暇が与えられ、各々の親元に帰宅が許されたときに、家族全員と兄一人、写真屋に撮つてもらつたものであつた。このとき兄が手にしていた日本刀は、この年に父が満鉄勤務二十五年表彰で表彰状と共にもらったものであつた。もう一枚は、先にも書いたように兄の大親友で、

夏冬の休みには東京から我が家に帰って来て、家族同様に過ごしていた。軍隊では兄は陸軍、大親友は海軍と進路は違ってしまったが、彼から二十年の六月、母と私に宛てて「これから移動します。

元気でいて下さい」という意味のハガキをくれた。簡単な文章ではあったが、これが一生の別れを告げる遺書になるうとは、思いもしなかった。大親友は、南方で戦死した。

その後も、相変わらずソ連兵たちが物色に押し入ってくる日が続いた。ある日、母は私に「今日は様子が変だから、各部屋に通じている廊下の真ん中で、私の後ろに立っているように。そして私が足を蹴ったら、あなたはすぐ逃げるように」と言った。物色している仲間から一人抜け出してソ連兵が近づいて来て、私に「こつちに来い」と手招きをした。母が私の足を蹴った。私は裏口に向かって走り、ドアに挿してあった鍵を素早く抜き取り、外側から鍵を掛けた。追いかけて来た兵士がドアに体当たりしてきたが、部厚いドアはびく

ともしなかった。二度、三度と体当たりをして、だが諦めて、今度は母に来いと言ったという。ロシア語の少し分かる母がとぼけたように応対しているうちに、仲間たちが玄關から出て行ったので、仕方なく一緒に出て行ったことであつた。

あのころは、年頃の娘を持った親たちは神経をすり減らしており、本当に大変だつた。私自身も、あのとときソ連兵に捕まっていたら、と思うだけでもぞつとする。生きて日本に帰れなかつたであろうし、当然今の私はいない。我が家から出て行った兵隊たちは、裏の新婚夫妻の所に押し入っていた。駆けつけた人たちは、抱き合つて泣くばかりの二人に慰める言葉もなかつたとのことだつた。私の同期生の男性は、妹をかばつて撃ち殺された。一カ月近く続いた暴行略奪なども、囚人部隊が引き上げたことでやつと下火となったが、今度は男狩りが始まつた。男性が貨車に押し込まれ、シベリアに運ばれるのだった。運ばれる途中、暗い貨車から飛び下りて高粱畑に逃げ、やつとのこと

哈爾濱の家に帰れたという話を聞かされ、男の人も大変だったのだと思った。

消息が分からなかった父が、二カ月後の真夜中に中国服に身を包み、何一つ持たずに中国の人々の手で家に無事送り届けられた。どのようないきさつだったのかは私は聞いていなかったの、事情はどうとう分からずじまいである。

父と弟は、昭和二十年十月、旧満鉄社員会が組織した「満鉄作業団」に参加し、ソ連軍の労務使役に約六カ月携わった。毎日、煤で汚れた顔で戻った。そのとき、少しばかりの石炭を持って帰って来るので、冬を過ごすのに大いに助かった。その後引き揚げるまで、道路で残っている衣類や家具、タバコなどの販売を続けた。私は一歩も外に出ることなく、家族の食事、洗濯を受け持った。八路軍が進駐して来て、初めて外出を許された。

敗戦と共に、すぐに自宅を追い出された人たちがいた。私のいたアパートでは追い出されることもなく、引揚げまで住めたのは本当に幸いだった

と言える。友人の一人は、「ソ連将校の住宅にする。一時間以内に退去せよ」と言われ、持てるだけの物を持って知人宅に同居させてもらうことになった。ある日、彼女が外出から帰ってみると、家中は荒らされ、知人の顔が変形するほど殴られていて、彼女の父親の姿はなかった。「年ごろのあなたが家にいなくて良かった。多分、お父さんはもう帰って来ないだろう、覚悟しておきなさい」と言われたという。十日ほど経って、公安局から植木園にある死体を引き取るように、と連絡があった。遺体引き取りに際して、「スマートだったお父さんの姿だけを覚えていなさい」と言われて、遺体引き取りには連れて行ってもらえなかった。引き取りに行った人から後で知らされた話によると、父親は殴り殺された上、全裸で放り出され凍死している、全く誰だか分からない状態だったとのこと。引き取りに行った人が苦勞して指一本切り取り、茶筒に入れ七輪の炭火で焼いて、持ち帰ってくれた。ひと筋の煙がスーッと立ち上り焼ける

のを待つ間、拉致され惨殺された彼女の父がその瞬間何を思ったか、東京の祖母のもとに帰りたいか、ただらうに、ここで殺される父親の無念さ、悔しさを思うと、可哀想で止めどなく涙が流れたという。彼女は母親を病気で前年に亡くして、長女である彼女は父親から「自分にもしものことがあったときには妹、弟たちをしつかり守って、東京の青山にいる祖母の所に行くように」と言われ、二冊のノートを手渡されていた。ノートには、東京の地図や細々したことが書かれていたとのこと。人の話では、彼女の父親は同姓同名だった特務機関長と間違われ、密告されたのではないかということであった。尊い命を奪われたことを、本当に残念に思った。当時、死体を焼く薪が手に入らなかったこと、冬の気温が零下三十度近くになるので十センチメートルの穴も掘れなかったため、遺体をそのまま放置してきたことが、彼女の心の重荷となって消えないでいた。引揚げのとき、父親の一片の骨をお守り袋に入れ、首からかけて日

本に持ち帰ったとのことであった。日本で最初の女学校の同窓会で出会い、お互い無事であったことを喜び抱き合つて涙したが、この同窓会ではお互いに再会できた喜びで、みんなも涙、涙であった。

四 引揚げ

終戦から一年近くなるというのに、いつ日本に帰れるのか、今後どうなっていくのか、見当もつかず不安な日々が過ぎていった。住宅事情はますます悪化し、立ち退きを迫られる人たちが増えていった。日本人会から、我が家にも二所帯が割り当てられてきた。トイレ、炊事、風呂なども共有となり、毎日が息詰まるような生活になった。いつ日本に帰国できるのかは不明だが、日本人同士助け合つていくしかなかった。

昭和二十一年八月二十四日、突如として明朝出発との通達がきた。準備に追われているとき、突然友人が一人で尋ねて来た。「ご主人が留用となり、しばらくは日本に帰れるかどうか分からないので、

お別れに来たとのことであった。彼女と会うのは女学校卒業以来で、三年ぶりであった。留用された人たちは五年後に帰って来たが、その友人の姿はなかった。胸を患って、隔離された病院で淋しく亡くなったとのことであった。私の手もとは、卒業記念に二十人で撮ったセーラー服姿の写真を貼ったアルバムがある。

昭和二十一年八月二十五日朝、リュックサックを背負い地区班ごとに隊列を組んで、住み慣れた家を出た。徒歩で哈爾浜駅に向かったが、途中の道路では中国人たちが黙って私たちを見ていた。どんな思いで私たち日本人を見ていたのであるか。中には、「今帰国しても、日本には変な爆弾が落とされて街は焼野原、食べるものもないようだ。大事にするから嫁さんになって残れ」と声をかけられる女性が何人かいた。駅に着くと、持ち物検査が始まった。私の班では一人の違反者も出ず、ほっとした。しかし、中学二年生の弟が、英語の辞書を持っていたのをとがめられ、取り上げられ

てしまった。中学の入学祝いに父から贈られたもので、弟にとっては大事な物だったから口惜しかったであろう。検査に当たったのは、中国人学生班だった。

有蓋貨車であったが、無事引揚列車に乗車できで出発した。貨車一両に、一人の中国共産軍の兵士がついた。重い扉が閉められると真つ暗で、上の方にある小さな窓から、やっと光が入ってくるだけであった。

昭和二十一年八月二十六日、察家溝に着いた。貨車にはトイレなど付いていないので、外に出なければならぬ。しかし、貨車の床は高くて降り降りする梯子もないので、女、子供は一人で降りできず、その都度人の助けを借りなければならぬのが大変であった。翌二十七日、陶頼昭駅で下車することになった。国民政府軍と中国共産軍の連絡調整がうまくいかず、第二松花江北岸で野宿することになった。野宿など全く考えていなかったもので、夜中、明け方の冷え込みにはみんな

参ってしまった。このため、体調を崩す人たちも出てきた。

二十八日、レールが外された線路の枕木を踏んで、徒歩で第二松花江南岸まで行った。ここからは、国民軍支配下に入ることになり、全員整列させられて点呼となった。母は何かを感じ取ったのか、とっさに知人の子供を私に抱かせ、子供連れを装ったので見逃されたが、年ごろの女性数人が引き抜かれ、別の列に並べられた。引き離された家族の中には、泣き出す人もいた。その上、列車を走らせるには賄賂の金を出せという。お金の方は、みんなから少しづつ集めれば何とかなるが、別に並べられた女性はどうにもならなかった。团长も困り果てていたとき、数人の女性が团长に「私たちは日本を飛び出し、満州で接客商売をしてきた体です。今更日本に帰るよりも……」と申し出てくれた。この人たちの勇気ある申し出がなければ、引き抜かれた女性がどうなっていたか、今でも心から感謝している。トラックに乗せられ、い

つまでも私たちに手を振っていた、あの人たちの姿が忘れられない。その後どうなったのだろうかと思ふと、胸が痛む。

午後六時ころにやっと話がつき、発車することになった。今度の貨車は、側壁はあるが屋根のない無蓋車で、荷物扱いだった。女、子供が真ん中に座り、男性たちが周りを囲むようにしてくれた。警護兵は、発車と同時にさっさと車掌室に入ってしまった。寒かったが、雨が降らなかったのが幸いであった。

二十九日、新京に到着し、緑園収容所に入れられた。部屋の床板は全部略奪され、がらんどうの土間であった。ここで十二日間抑留されたが、その間に学校から連絡があり、新京神社跡に集まり、先生から専攻科卒業の免状や証明書などが手渡された。

昭和二十一年九月十日、奉天に着いたが、停車場は司令部員買収のため下車できず、貨車に乗ったままで過ごした。

十三日、錦県に着いたが、收容所は元馬小屋であつた所で、冷たい土の上で、ここでも十二日間の生活となつた。だんだん体調が悪くなる人が増えてきた。特に乳幼児は弱つてしまつた。男性は、しばしば作業に駆り出された。

二十四日、葫蘆島に着いた。ここは最後の集結地であるので、先生方や友人たちとも出会うことができた。ここで旧日本海軍の駆逐艦「花月」に乗艦した。蛍の光のメロディが流れる中、いよいよ満州とのお別れとなつた。

九月二十七日、博多港に入港したが、ここでも沖で一週間停泊、その間帰国のためのいろいろな手続きがあり、身体検査が行われ、消毒のため頭からつま先まで白い粉をたっぷりかけられた。

十月四日になつて、やつと日本の土を踏むことができた。大濠公園の宿舎に入り、久しぶりに布団の上でゆつくり休んだ。ここで二泊し、一人ずつに毛布一枚、千円札一枚と引揚証明書が手渡された。なぜか、お鍋をもらった。

五 日本での生活

十月七日午前、両親と私、弟の四人は、列車に乗つて父の生家、岡山県勝間田町に向かつた。車中から見る風景に、やつと日本に着いたという安ど感があつたが、これからどんな生活をしていくのかという不安感もあつた。父の実家とはいつても、そのころは父の弟一家が百姓をして暮らしていた。百姓とはいえ、食糧事情は悪かつた。父は、百姓仕事は苦手のようであつた。弟は早速中学に編入し、遅れた学業の取り戻しにかかつた。

半年近く過ぎたころ、母の実家の叔父たちが蔵を住居に改築してくれたので、移り住むことになつた。「学徒出陣」で北支前線に出征していた兄が、幸いにも無事に日本に帰つていて、叔父たちの勧めで東京の法政大学に復学していた。兄は私たちの消息が分からず、一人ぼっちになつてしまつたと思つていたので、私たちが無事に叔父たちの所に帰つていたのを知り、大変喜んだ。田舎では父の仕事もなかなか見つからなかつたが、弟が岡山

県立津山中学三年に編入できたということで、私たちも津山市に移り住むことになった。そして、弟は無事中学を卒業、東京の法政大学に合格し、上京した。その年、兄は大学を卒業し、東京で就職した。取り残された思いの私は、日本の田舎の生活に馴染めなかった。生活の大きな変化のためか、一年ほど生理が止まってしまった。見かねた両親は私も上京させ、兄妹三人で暮らすようにと送り出してくれた。しかし、二人とも両親に学費などの経済的負担をかけないよう、アルバイトをしたり奨学金の給付を受けて大学を卒業、就職した。

私も上京した昭和二十三年十月には、法政大学の事務職に就くことができた。そのころの大学は、東京大空襲で校舎の大半が焼け、残った校舎で授業を再開していた。学生は復員時のままの軍服姿だったし、みんな貧しかったが、無事生きて再会し勉強ができるという喜びに満ちあふれていた。しかし戦後の生活は苦しく、授業料納入が遅れる

者、アルバイトなどに追われて退学する者が増えていった。日本の国内も、少しずつ落ち着いてくるとともに、次々と立派な校舎が建てられ、学生たちも多くなつた。

私も平成元（一九八九）年三月に無事定年を迎え、四十一年間の勤めを終え、早いもので年金生活に入って十八年目になるうとしている。戦後も六十年を迎えた。両親も他界し、私も父母の年を越え、平凡に幸い健康で暮らしている。しかし一昨年九月に、一番頼りにしていた弟を失った。弟は母校の小、中、大学の同窓会の幹事をこなし、住居近くの埼玉県所沢市のある「中国帰国者定着促進センター」で、中国語を生かしボランティア活動をしていた。それは、日本語と生活習慣を学ぶ「大地の子」の勉強のお手伝いで、わずか四カ月でそれぞれの定着地に送り出すという仕事であった。

戦後も六十年経ったが、私たち昭和初めに生を受けた者が敗戦を迎えるまでは、「満州事変・日中

戦争・太平洋戦争」と、ほとんど戦争の時代に育ってきた。昭和から平成と年号も変わった。戦争を体験した世代は高齢となり、戦争を知らない世代が多数となってきた。二十世紀は戦争の世紀だった。二十一世紀を平和なものにするためにも、次の世代に伝えていかなければと思う。しかし、今も地球上のどこかで戦争が絶えないことは、本当に悲しい。二度とあの悲惨なことが起こらないことを願うとともに、戦争はその人たちの意志にかかわらず、幸せな人生を引き裂いてしまうものである。戦争とはどんなものであったかを、歳月と共に風化させてはならないし、多くの人たちの犠牲の上に今日ある私たちが、平和を忘れてはいけない。

戦争を挟んだ私の青春

長野県 塚原 節

一 生い立ち

昭和四（一九二九）年三月二十二日、満州国撫順市北台町に私は生まれた。大正十一（一九二二）年に渡満した父は三十四歳、母二十七歳。三つ違いに兄がおり、次に姉に当たる人がいたそうだが、緑と名付けられたままに亡くなったということ、戸籍上私は次女である。

父は満鉄経営の撫順永安台小学校の訓導であった。撫順市は露天掘りで有名だった石炭の街であり、後年修学旅行で訪れてみた壮大な景観は、まさに世界的とも言える大規模なものであって、今も眼の底に残っている。

昭和六年春、父は南満の中心地、奉天（瀋陽）の教育専門学校附属の千代田小学校に転任となり、一家は奉天市藤浪町四十五番地に転居した。市内